

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏名	R.S.	学部・学科	国際商学部国際商学科
学年	学部2年	派遣国	マレーシア
派遣大学	アジアパシフィック大学		
プログラム名	English Summer camp Malaysia		
期間	2024年 6月 30日～ 2024年 7月 29日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

実用的な英語の技能を習得することを目的とした授業であった。まず、1日目のガイダンスと同時にレベル分けのためのテストが行われ、レベル毎にクラスが分けられた。なお、自分がどのクラスに属し、担当の先生が誰になるかについては2日目の授業開始前に横市で同じプログラムに参加した人が参加しているグループチャットに通知された。(ちなみに私はlevel3のクラスへ配属となった。)

次に、授業の具体的な内容と所感について述べていく。授業では、午前の2時間で長文読解とフォーマルな形式の英作文を取り扱い、午後の2時間でリスニングとプレゼンテーションなどを通じたスピーキングを取り扱った。課題は主にプリントに記された文法の問題や教科書での単語の意味を答えるような問題と、配布された教科書に準じたオンラインサイトからの課題が行われた。スピーキングや英語での会話の聞き取りの練習が取り扱われた。なお、試験は授業2週目と最終週にそれぞれ2回行われた。内容は2回の試験で大きな差はなく、与えられたトピックに関する英作文、大問2題の長文読解、いくつかの会話を聴き解答するリスニングという形式で行われた。これらは私が通っていた中学校や高校で出された英語の課題や試験とほぼ同じで、独自性があるとは感じなかった。

その一方で、独自性があると私が感じた課題や授業内容もあった。例えば、リスニングの模擬試験において「洋楽の歌詞を聞き取り単語の穴埋めをなさい」という旨の問題が出題されたり、スピーキングの授業で結婚や文化の保護などのトピックが提示され、それに関する自分の賛否などの意見を5分ほどの本格的にプレゼンテーションを行ったりする課題があった。この本格的なプレゼンはスピーキングの試験として行われたものであったが、発表者へ質問が飛び交ったり、ユーモアも交えた発表があったりして和気あいあいとしていた。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500字程度)

特にライティング(英作文)の授業において、フォーマルな英語の形式について学ぶことができた。Can'tやDon'tの形は口語であり、文章を書く際には望ましくないことなどは今まで授業を受けてきた際に知り得なかった知識であり、新たな学びであったと感じている。

また、日本と他国の英語教育の違いを五感で通じて感じる事が出来たとも考える。英作文や英文読解、リスニングの演習は日本で受けた授業と大差はなかったが、スピーキングの演習で意見を理由と共に述べる本格的なプレゼンテーションを行った点は日本の授業と異なる点であったと感じている。

しかし、授業を受けて得られたのは知識というよりむしろ良いマインドへの影響であると感じている。具体的には、自分の意見を積極的に発信していこうとするマインドである。例えば、主にカザフスタン人の留学生は授業中に問いの答えを先生から問われた時や自分のしたことを自主的に発表する機会があった時に、積極的に前に出て発言していたり、現地の交通機関を使いこなすクアラルンプール市内の様々な場所に行っていたりした。新しい環境でも積極的に環境について知り、行動していこうとする姿はとても印象的であり、私も見習っていききたいと思った。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように(気持ちなどが)変化したか。(400字程度)

語学研修であり、英語に苦手意識があるわけではなかったのですが、授業を受ける前に不安は感じていなかった。むしろ、クラスが決まり、授業を受ける前までは所属するクラスのレベルは自分にとっては不十分であると感じていた。しかし、いざ授業に臨んでみると自分にとって配属先のクラスのレベルは丁度良いものであると感じた。「授業で学んだ知識」の項目でも記した通り、授業の内容についていけず学習効果が見込めない、という程度ではなかったが、簡単すぎて学習効果が見込めない、と感じることもなかった。

最終試験のリーディングとリスニングの問題はやや簡単であると感じたものの、それでも英語を実践的に使いこなす練習として、より高い学習効果が得られたと感じている。このプログラムへの参加を通して、物事は何でも一度やってみないと意味があるか、また、所感はどうであるかということとは分からないということを改めて実感した。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300字程度)

まず、口語ではないフォーマルな英作文の様式を学べたことが一番今後活かせると思った。具体的には、将来的に英字で論文を執筆することになった際や海外の取引先とのメールでの連絡で大いに役に立つと考えている。

しかしながら、このプログラムを通して私が活かしていきたいことは技能の面よりも態度の面にあると感じている。「学んだ知識等」の欄にも記したが、クラスが一緒になった留学生が積極的に発言などをしたり、発表で滞在していたクアラルンプールを周遊したことについて話したりしていた。私もそれを見習い、プレゼン後の質問や授業内での発言を積極的に行うようにしていた。今までも私はプレゼンや人前で発表することを心掛けていたが、未だに躊躇する面もあったためできるだけ減らしていくことを心掛けていきたいと思った。

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏名	N.K.	学部・学科	国際教養学部・国際教養学科
学年	2	派遣国	マレーシア
派遣大学	アジアパシフィック大学		
プログラム名	第2クォータープログラム		
期間	2024年 8月 5日～ 2024年 8月 30日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

授業は4技能を総合的に学べるように構成されていた。具体的には、午前の2時間の授業でリーディング及びライティングを学習し、午後の2時間の授業ではリスニングとスピーキングを学習した。4技能のテストは2週間ごとに行われ、全2回のテストがあった。

リーディングの授業は、主に読解力を鍛えるための演習を行った。文章のタイトルやイラストのみから内容を予想する演習や、文章中の単語が分からない時に前後の文章から意味を推測するトレーニングを行った。ライティングの授業では、三単現や動詞の時制変化、接続詞、前置詞、比較級、直喩などの用法の他に、異なる2つのエッセイの書き方を学んだ。どちらも2つのパラグラフからなるエッセイであり、主にそれらのフォーマットに集中して学習した。前半では人を描写するエッセイの書き方を学び、後半は物事の手順を説明するエッセイの書き方を学習した。リスニングの授業では、正誤問題や穴埋め問題など多様な形式で問題演習を行った。音源とプリントでリスニング問題を解く授業が主であったが、教室の外で行われた授業が最も印象的であった。「手を叩く」「耳を触る」「片足でジャンプする」などの先生の英語を聞き、指示通りに体を動かすというものであった。英語を即座に理解する能力が求められた。スピーキングの授業では、毎週1人ずつクラスの前で自国の文化を紹介したり意見を述べる機会が与えられた。事前に先生が与えるテーマについて考え、話す内容を準備し、授業では何も見ずに発表するというものであった。発表中、文法に間違いがあった場合は先生がその場で訂正し、優れた表現が出てきたときには解説が行われた。接続詞や前置詞の使い方についても学習した。

教室での授業の他に、4技能を鍛えるためのオンライン学習があった。それぞれの技能ごとに問題が設定されており、単語の意味や品詞を問う問題、正誤問題、穴埋め問題、スピーキングの録音を提出する問題などがあった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

授業を通して、英語の 4 技能を伸ばすうえでそれぞれ重要となる知識を学んだ。まず、リーディングでは、難しい文章の内容を理解するための効果的な方法について学んだ。タイトルやイラストから内容を想像しながら文章を読むことで理解しやすくなったり、分からない単語が出てきたときには前後の文章から意味を推測することが重要だと学んだ。次に、ライティングでは、多様な表現を用いることで読み手にとって分かりやすく興味を持ちやすい文章になることを学んだ。同じ言い回しを何度も繰り返さないことや、言い換えの仕方を様々知っておくことが良い文章を書く上で大切なのだと学んだ。また、リスニングでは、音声を一語一句正しく聞き取り理解するためには、語彙を増やすことが必要であり、そのためには毎日新しく単語を学び、1 日のうちに何度も書いて復習することが必要だと教わった。そしてスピーキングでは、上達するためにはリラックスした状態で学ぶことが最も重要だと学んだ。技能の向上のためには、「間違いに気づき、正しい言い方を学ぶ」ことが重要であるため、間違えることを心配して過度に緊張しているよりも、たとえ間違えてもリラックスした状態であることが大切なのだと学んだ。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

特にスピーキングの授業を通して、英語学習に対する意識が大きく変わった。スピーキングの授業では、毎週 1 人ずつクラスの前で自国の文化を紹介したり意見を発表する機会があった。先生からテーマが与えられ、それに対して事前に話す内容を準備して、その場では資料を見ずに話すよう求められた。はじめはクラスの前で話すことや、発表中に資料を何も見れないことに抵抗があり、不安や緊張の気持ちが大きかった。しかし、クラスメイトと仲良くなったり、クラスでは間違いから学ぶことに対してポジティブな雰囲気があったこともあり、回数を重ねることで不安や緊張を克服することが出来た。間違えても、それが自分だけでなくクラスの全員にとって学ぶきっかけになり、スピーキングを上達させることにつながるのだと学んだ。このことから、スピーキングに限らず、英語学習では間違えることに対して慎重になりすぎなくていいのだという意識を持つようになった。今までは、間違えることに対して敏感になりすぎていたのかもしれないと思った。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

今後の英語学習では、授業で学習した知識を活用しながら 4 技能の向上に努めるとともに、間違えることに対してネガティブな意識を持たずに学んでいきたい。特にスピーキングの授業を通して、間違いこそが学ぶきっかけになるということを実感したからである。以前は、間違えることに対して恥ずかしいと思ってしまっていたが、これからは間違えないようにすることよりも、間違いから学ぶことを大事にしていきたい。そのように意識を変えることによって、とくにスピーキングやライティングでは英語の表現の幅が広がるのではないかと考える。積極的に伝えたいことを表現し、間違いがあったときにはより良い表現の仕方を学び、技能の向上に向けて今後も努力し続けていきたい。